明治期の開業医・狩野謙吾の生涯
――臓器療法の発見者から神経衰弱の専門家へ――

山田真由美

1. はじめに

狩野謙吾（1865–1924，以下「狩野」）は，明治時代の開業医である．狩野には『神経衰弱の予防法』（1904）と『神経衰弱自療法』（1907，図1）という2冊の著書があり，これらは夏目漱石の蔵書にも含まれている．国立国会図書館所蔵の『神経衰弱自療法』では，見開き部分に佐藤進の書が確認できる[1]．

狩野はこれまでに，夏目漱石の文学に影響を与えた可能性[2]や，「神経衰弱」を大衆に広めた人物という観点[3]で考察されてきた．しかし狩野本人に不明な点が多いという認識は共通している．そこで今回，文献調査に基づき，狩野について判明したことを報告した．

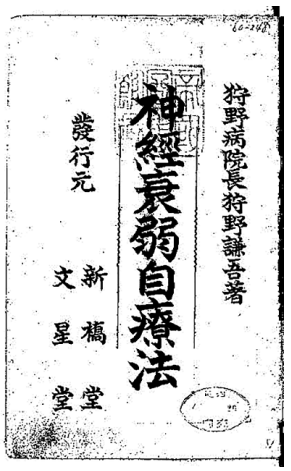

図1　『神経衰弱自療法』表紙（新橋堂ほか）

2. 調査対象

国立国会図書館リサーチ・ナビ，Google Books，聞蔵IIビジュアルのデータベースを利用し，「狩野謙吾」「狩野病院」，類似語として「狩野謙吉（注：誤字）」「狩野医院」のいずれかの語句を含むデータを抽出した．その結果，全967件のうち，重複を除き，559件が狩野の病院や著作の新聞広告，85件が新聞連載など狩野本人の書いた資料であった．（2018年11月時点）また，『現今日本名家列伝』（日本力行会出版部，1903）などから狩野の出自も判明した．

3. 人物

前述の『現今日本名家列伝』によると，狩野は1865（慶應元）年8月に宮城県黒川郡に生まれた．1889（明治22）年に後の東北大学である第二高等学校医学部を卒業，その後上京し「語學を獨乙協會學校に修め實地醫道を順天堂に修」め，1890（明治23）年11月17日の『官報』で医籍登録されている．狩野が卒業した第二高等学校は医術開業試験の無試験の対象であった．なお，狩野は大学を卒業していないので医学士ではない．よって狩野が一貫して肩書を“狩野病院長”としていた説明がつく．

医籍登録から約10年後の1901（明治34）年9月から12月にかけて，狩野は“臓器療法の発見者”として東京朝日新聞に取り上げられる．記事によると，狩野は陸前古川で脚気の研究をしている際，偶然に臓器療法の効果を発見，その研究のため1887（明治20）年に上京した．しかし，その後開業した狩野は，臓器療法ではなく神経衰弱の専門家へとシフトしていく．

4. 狩野病院

『東京案内下巻』（1909）によると，狩野病院は1901（明治34）年に神田区和泉町で創設，後に小石川区原町に移転した．『風俗画報 臨時増刊（新選東京名所圖會第45編）』（1906）によると，専門は「神經衰弱，衰弱症官能障害症」，『東京社會辭彙』（1913）によると，医員三人，病室十室を有し，

診察時間は午後，宅診金は二円，往診金三円以上，入院料は一等一日金二円，本郷金助町に分院があった．この分院は後に本郷区弓町に移転している．

5. 文学界とのかかわり

当時の作家や活動家の日記や伝記の中に，狩野病院への通院や，狩野との交流が確認できる．一部を紹介する．

・坪内逍遥　『坪内逍遙研究資料，八』（1979）

五月二十日　（略）内ケ崎の紹介にて，本郷金助町に臓器療法の医師**狩野謙吉**（ママ）を訪ねて診察を乞ひ　薬を求めて帰る（略）

六月十四日　（略）しばらく**狩野**の薬を廃すべしと決心す（略）

・吉野作造　『吉野作造選集 13（日記 1)』（1996）

一一月二〇月　（略）夕方兼テ招待セラレ居ルニ付キ狩野謙吾氏宅ニ行ク　船橋君中川君菅野君志賀君遠藤君ナド来席

・森田草平『煤煙』

其医者の紹介で，小石川茗荷谷の奥の狩野病院といふへ這入ることに成つた．医者の宅の電話で訊いて貰ふと，ちょうど病室もあいているといふので，これも好都合であった．

6. 執筆活動

狩野は 1905 年から 10 年ほどの間，診療活動の傍ら盛んに執筆活動を行っている．東京朝日新聞では，1905（明治 38）年 11 月から 1906 年 4 月の「神経衰弱予防法」，1909（明治 42）年 4–5 月の「厭世自殺の予防」で 2 度連載した．その他，『実業の日本』『婦人くらぶ』といった一般向けの雑誌に計 15 篇の記事を寄稿している．

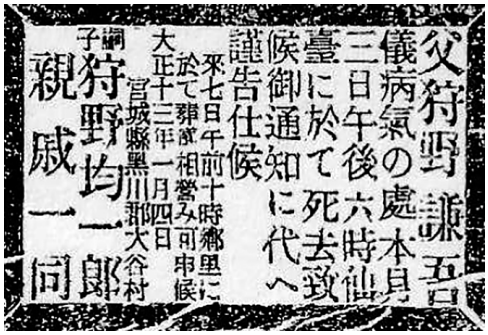
父 狩野謙吾
儀病氣の處本月三日午後六時仙臺に於て死去致候御通知に代へ謹告仕候
來七日午前十時鄉里に於て葬儀相營み可申候
大正十三年一月四日
宮城縣黑川郡大谷村
親戚一同
狩野均一郎
子嗣

図 2　訃報（東京朝日新聞夕刊 2 面，1924.1.7）

1905 年以降情報は途絶えるが，1924（大正 13）年，東京朝日新聞に訃報が掲載された（図 2）．

7. おわりに

狩野謙吾は，新聞広告を活用したり，庶民に向けて医学を説いたりするなど，帝国大学出身の医学士らとは異なる独自の活動をしていたといえる．当日の質疑では，狩野の医師としての資質や新聞広告を頻繁に出している理由等についてご指摘を頂いた．今後，社会背景もふまえ，医学の歴史という観点で意義のある研究に発展させていきたいと考えている．

参考文献

1）神経衰弱自療法――国立国会図書館デジタルコレクション．http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835041
2）高橋正雄．漱石蔵書中の精神医学書――狩野謙吾の『神経衰弱の豫防法』と『神経衰弱自療法』．聖マリアンナ医学研究史 2009；84
3）佐藤雅浩．精神疾患言説の歴史社会学：「心の病」はなぜ流行するのか．新曜社；2013

（平成 30 年 11 月例会）